

9. 有限会社鹿川グリーンファーム(埼玉県)

～65歳までの継続雇用と職場環境改善で、

高年齢者の能力を最大限引き出す～

会社概要

会社名	有限会社鹿川グリーンファーム
業種	養鶏業
代表者名	代表取締役 丸尾敏晴
設立	昭和41年
資本金額	2,200万円

1. 企業の概要と雇用の概況

埼玉県岡部町に本社・農場をおく有限会社鹿川グリーンファームは、昭和41年に埼玉県坂戸市で15,000羽の採卵鶏を飼養する「有限会社鹿川養鶏場」として設立。現在、岡部農場（埼玉県岡部町）、坂戸農場（埼玉県毛呂山町）、茨城農場（茨城県小川町）、西那須農場（栃木県那須塩原市）の4農場で60万羽の採卵鶏を飼養している。

従業員は78名で、55歳以上の高齢者は29名（37%）、そのうち60歳以上が4名（最高齢64歳）となっている。「きつい、くさい、きたない」と言われてきた畜産業にあって、従業員の平均年齢は50歳と高年齢者の多い会社である。また、男女別では6割以上を女性が占めている。毎年平均年齢が高くなっていく傾向にある。

鶏の飼養管理は、「給餌」、「集卵」、「除糞」が基本である。

「給餌」は、少羽数の場合は飼料をバケツ等に入れ、餌箱に給餌していたが、エンジン付配餌車が開発され、餌桶（箱）に短時間に給餌することができるようになり、作業性は著しく改善され、作業者が3万羽～4万羽の鶏の管理を行えるようになった。その後、システム鶏舎が開発され、飼料タンクから餌桶（箱）までが自動化され、自動的に給餌が行えるようになった。

「集卵」は、放し飼い鶏舎などの場合には、かごなどを持って一個一個の卵を集めていたが、大規模鶏舎が建設されるようになり、ケージによる飼養となった。産卵された鶏卵は、鶏のいる場所からケージの上を転がり、鶏舎で直接集卵して30個トレーに詰め、鶏舎から倉庫まで運び、コンテナ詰めの上、10kgに計量し、鶏卵コンテナを7～8段に積み上

げ出荷をしていたが、システム鶏舎の場合、生み出された鶏卵は、集荷ベルトで倉庫に運ばれ、10個パックにパッキングされ、出荷される。

「卵は物価の優等生」と言われるように、昭和40年代の価格と現在の価格とは大きく変わっていない。それは、鶏の生産性の向上や飼養羽数の大規模化に生産コストの低減等によってもたされたものである。

2. 高年齢者雇用・活用の背景・目的

農家養鶏から規模拡大によって企業養鶏へと移行する中で、雇用の問題と従業員の高齢化は避けて通れなかった。

集卵作業を行う1名の女性作業者が受け持つ鶏の羽数は15,000～20,000羽、1日に3～4回同じ鶏舎の集卵を行う体制を取っていたために、規模の拡大とともに集卵作業者の確保が難しくなってきた。

鶏舎構造が、労働生産性や雇用の確保の大きな制約要因となっている。しかし、鶏舎改築には多大な資金を要するため、たやすく建築できるものではない。したがって、現在ある鶏舎をどのように使用し、どのように改善して安定的な雇用を確保するかが大きな問題である。

昭和63年～平成元年にかけて、本社を置く岡部農場を開放型高床式システム鶏舎に改築し、できるだけ機械化し集卵業務等の自動化を図るために社内GPセンターを開設した。

また、生協での10個パックへの取組みが増える方向にあったため、平成7年にGPセンターの機械の入替えを実施した。当初は10kgコンテナ詰めのみが取組みであったが、時代とともに7kg・5kg・10個パックと荷姿の多様化が進み、さらに10個パックの割合が多くなり、煩雑さが増してきた。

栃木の農場から毎日届けられる鶏卵約5tと、岡部農場の鶏舎から集卵ベルト・バーコンベア等を経由して、日量約10t合計15tの鶏卵が毎時60,000卵（約4t）処理するGP専用の機械にかけられ、検卵（破卵、汚卵等の除去）、計量、5kgもしくは7kg単位にトレー詰めされ、また、モールドパック（紙パック）にパック詰めされ、出荷ラインに流れてくる。計量された鶏卵コンテナは、バーコンベアで運ばれ、積み上げ作業が行われ出荷される。

坂戸農場の半分の鶏舎は、ケージに集卵ベルトを設置し、鶏舎内を移動することなく集卵できるよう集卵作業の軽減を図った。

多くの資材、製品の移動は、専用の台車や鶏卵コンテナ用キャスターを導入することによって作業が容易になった。

さらに、岡部GPセンターにはテーブルリフターを設置することによって、作業者の負担を軽減した。

3. 継続雇用制度の導入と高年齢者の人事配置

(1) 継続雇用制度の導入

基幹労働力である高齢者の人材確保のために、平成9年より継続雇用制度を導入し高齢者の積極的な雇用を開始した。継続雇用の形態は、再雇用とし、65歳まで更新する。

(2) 高齢者の人事配置

継続雇用者は、定年前の職場で培った経験と技術を活かせるように、そのままの配置で作業を行っている。新入社員と継続雇用者の作業量は圧倒的に継続雇用者が多いことになる。

平成13年4月、「無選別・無洗卵」であるが故に、コンテナ・トレーの衛生管理に努める必要性があり、60歳を超えた高齢者が視力・体力を必要とするGPセンターの検卵作業や包装作業等のライン作業から、状況に応じたスピードで作業できるコンテナ・トレー洗浄設備を新設し、作業配置転換を行ったことにより継続雇用が可能となった。

4. ハード面の改善（インフラの整備）

鶏卵は、取扱方によっては割れるものであり、「集卵」作業を機械化することは難しいものであるが、高年齢者の確保と高年齢者に適したシステムづくりを以下のとおり実施した。

(1) 集卵作業の自動化（鶏舎の改築、GPセンターの開設）



集卵は、農場の鶏舎から集卵用台車を用いて、一個ずつ手作業で選別しながらトレーに集めてくる。1名の作業者が受け持つ鶏の羽数は15,000～20,000羽、1日に3～4回同じ鶏舎の集卵を行う。集卵用台車に積み上げられた鶏卵の重量は多い時には約200kg以上にもなり、集卵しながら台車を押すという作業はかなりの重労働である。

そこで、岡部農場に隣接してGPセンターを開設した。鶏舎から集卵ベルト、バーコンベアを経由してGPセンターに集められた鶏卵は、毎時60,000卵処理するGP専用の機械にかけられ、前検卵（二黄卵、破卵の除去）、検卵（破卵、汚卵等の除去）した後、計量、5kgもしくは7kg単位にトレー詰めされ、また、モールドパック（紙パック）にパック詰めされ、出荷ラインに流れてくる。そして、5kgもしくは7kg単位にコンテナに詰められる。

（２） テーブルリフターの導入

出荷時の鶏卵コンテナの積み上げは８段である。鶏卵コンテナの総重量は約 13 k g にもなる。７段目以上は、斜めに持ち上げるため、作業者の肩、腰等に負担が大きかった。また、鶏卵コンテナは、床面に直置きであった。そこで、テーブルリフターを設置し、鶏卵コンテナ積み上げ作業の軽減を図った。また、鶏卵コンテナ専用キャスターを作成し、移動作業を軽減した。

（３） トレー専用台車の導入

回収された鶏卵コンテナには 8 枚のトレーが入っている。コンテナとトレーに分け、トレーは台車に乗せ、機械のトレー搬入口に運ぶ。移動の際、バランスを崩してトレーが散乱することがあった。新しく導入したトレー専用台車は、従来の台車と同様のトレーを積み込むことができる。トレー専用台車は、横 4 列×縦 2 列で約 1,600 枚を積み込み、ゴムバンドをすることによって崩れることを防げるようになった。満載したときの重量は 300 k g にもなる。

（４） コンテナ・トレー洗浄室の新設

当社は、生協の組合員への直接販売のため、衛生管理には十分な注意を払っている。岡部農場・オカベ G P センターは、農場の中の G P センターであるが、「食品工場なみの衛生管理」を目標に衛生管理を行っている。これは、全農場に実施中である。鶏卵コンテナは「繰り返し使用可能な専用プラスチックケースの採用」



であり、組合員がコンテナ・トレーを返却時には洗って返すシステムであった。しかし、組合員の家庭や生協のセンターなどでの保管方法によっては、ほこりや雨漏れすることがある。また、割れた鶏卵によってトレーが汚れることがあった。平成 13 年 4 月、岡部農場・オカベ G P センターに併設してコンテナ・トレー洗浄室を開設した。鶏卵を出荷するために、毎日約 1,500 ケースのコンテナ、約 5,000～6,000 枚のトレーを使用している。

5. 制度導入後の効果と今後の課題

定年後の継続雇用者が健常者であれば誰でもできる作業システムの確立と作業環境の改善を主目的とし、労働力及び生産性の確保が図られるよう上記改善策を実施したが、その効果として、明るくきれいな職場で安心して働けるようになり、高年齢者のみならず、他

の従業員も含めて労働意欲の向上が図られた。

なお、現状は、定年後の継続雇用でも、現役時代と同様の労働条件となっている。今後は、給与面も含めて処遇の問題を再検討する必要がある。また、生産性とどう結び付けていくか、さらに、4つの農場があり、地域により、気候や意識の違いがあり、なかなか画一的にはいかないので、その問題もクリアしなくてはならない。